

| | | |
|----|--------|---------|
| 上越 | 土樽から蓬峠 | No. 110 |
|----|--------|---------|

蓬峠から大源太山を廻って越後中里へ下る旅を計画したのだが……

昭和43年6月29日

上野発22時03分で出発の予定だったが、不慮の残業で時間に間に合わず、22時29分の急行越路に辛うじて乗車。窓の外は大雨。この列車は籠原あたりで先に出た22時03分発の列車を追い抜き、高崎に先に着く。こういうことは知っていて損なことはない。

車内でガイドブック、地図等を一読の後ひとねむり。雨はいつの間にか止んだようだ。

昭和43年6月30日

高崎0時22分着。跨線橋でサラリーマンスタイルから登山スタイルに変身。スラックスはニッカーとストッキングに、ワイシャツは登山シャツに着替えている内に列車は到着し石関・阿部・太田の三人と無事合流。

列車は満員に近い状態で、空いている急行でゆっくり寝ておいて正解だった。

雨上がりの車窓の風景は、涼風とともに蛙の合唱や蛍の光。乗客の大半は沼田と土合で下車してしまい、清水トンネルを抜ける客はかなり少ない。

土樽3時02分着、土砂降り。雨具を着けて出発して行く奴らを見送った後、駅舎内でゆっくり仮眠。

6時半起床、駅の中で朝食。小降りになったところで、8時に傘をさして出発。

時には傘をさして歩くことが決して億劫でないこともある。不思議なことに、傘の下に時々覗かせる顔はどれも皆東京の雨の夕暮れ時とは違って明るい。

雨で出発時刻が大分遅れたので作戦変更。大源太山はあきらめて、とりあえず蓬峠まで行ってみることにする。

コンクリートになってガッチリした万太郎の吊り橋を右手に見送り、やがて山道になると道は先ほどまで降っていた雨を集めて川ようになってきた。まるで沢歩きでもしているかのような錯覚に陥る。

雨は徐々に上がり、峠が近くなる頃には空に青いものが出始めてきた。高度を上げるにつれて足元の草むらも草丈をずっと下げ、イワカガミ、ツガザクラ、イワウチワ、そしてところどころにドウダンツツジの一叢。

峠近くの小沢の流れで第一回目の昼食。沢の冷たくきれいな水で、にわか作りの野点の立ち飲み茶会。(右上の写真)
蓬峠着は12時40分、ここで約二時間をかけて二回目の



踏み跡 < My mountains >

昼食。雨は上がりガスも切れ、谷川岳東面の岩場、白毛門連山もみな鮮やか。特に武能岳から茂倉岳への緑の柔和な曲線を背景に立つヨツバシオガマの薄紅色は、我々を一瞬ではあれ夢心地に浸らせてくれる。目を左に移すと、武能岳、茂倉岳とヨツバシオガマの組み合わせとは逆に幽ノ沢、一の倉沢、東尾根の岩場の姿はモノクロームの墨絵の世界、そしてそれらは勇猛そのもの。まさに野武士と乙女の如しというところ。

帰りは湯檜曾川に下ってもよかったが、時間的余裕も考えて往路を戻って土樽に下ることにした。

土樽駅17時30分着。空腹この上なき状態だったが、この駅には駅前の商店街はない。仕方なくザックの中の食糧の残りを食べて腹の虫をなだめて18時42分発の終列車に乗車。水上で第5佐渡に乗り換えて、ビュッフェで食事をしてようやく腹が治まった。急行に乗り換えたので21時57分に上野駅に帰着することができた。

土樽駅から蓬峠を往復しただけの、シンプルな山歩きになってしまった。

上越の山は初夏が素晴らしい。何が素晴らしいか？

やはり緑に輝く草原のような稜線、わずかにルンゼに印を付けた残雪、花、鳥。上越の山へ行くと、そんな材料に魅せられてどうしても帰りが遅くなってしまふ。

以上



(修正・更新:2023年12月)